

社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役会長 稲垣良次

2025. 5
No.381

お陰様で

―運の強い幸せな自分―

現在は大変元気になりましたが、去る2月18日、出張で東京へ向かう途中、名古屋駅の待合室で「どうも言葉が出てこない、よくつまずく、スマホの操作がいつも通りにできない…」などの症状が出てきました。同行していた(妻)美奈子さんも「様子が変だ」と気づき、かかりつけの大病院へ連絡し、急遽タクシーで向かいました。到着した時にはすでに病院も準備をしてくださっていて、すぐに検査し、その日のうちに頭から血液を抜く手術を受け、一命を取り留めました。

その病名は『慢性硬膜下血腫』というものでした。実は、前日にその病院で検査を受けていましたが、教授は「まだ大丈夫だから一週間後に手術日を決めましょう」という程度の診断でした。

手術は無事に終了し、火曜日に緊急入院をしてその週の金曜日には退院することが出来たことは私の運の良さだったように思います。

また、美奈子さんの決断や、病院の先生方のチームワークのおかげで一命を取り留めることが出来たと思っております。今健康でいられることに感謝申し上げます。

生活習慣の変化

術後の生活については、毎日飲んでいたアルコールも家ではほとんど飲まなくなりました。お付き合いの席では、相手の方に失礼のない範囲の程よいペースで楽しませていただいています。

少し気になるのは、食事が非常においしく食べすぎの傾向があり、体重管理が確立できていないことでしょうか。

しかし、よく眠れることや目覚めがとても良いことなど、飲酒の習慣を変えることで発見(大袈裟ですが)できたこともあり、非常に喜ばしいことと感謝いたしております。

皆さんにおかれましても、タバコや飲酒、睡眠等々、幾分留意されることを願っております。イナテックグループの方々のご健康をお祈りいたします。

イナテック版 私の履歴書

今回のNo. 381からNo. 400まで、イナテック版『私の履歴書』と題して、生まれてから今日に至るまでのお話をさせていただきます。稲垣鉄工所、稲垣鉄工、イナテックと変遷を続けた中で、皆様に伝えておきたいことを書き残そうと思います(私の記憶を辿って書いた文章ですので、時期や数字についてはイメーجとして読んでいただければ幸いです)。

誕生から小学生まで

私は1952年(昭和27年)11月1

日生まれです。近所の産婆さんの協力のおかげで、自宅の仏間で生まれました。昔は「長男」が家を継ぐという社会的慣習があり、私の父であるイナテックの創業者、稲垣邦松氏にとって長男の誕生は最大の願いだっただけです。

邦松氏は、中畑町の本家では三男という立場で、いずれ稲垣家を出て独立することが使命でした。邦松氏の両親はガラ紡と呼ばれる紡績機を利用した事業を営んでおり、長男の正雄氏は平坂町で、次男の伊助氏は中畑町でその家業を継ぎました。

三男の邦松氏は相撲が得意でした。西尾地区の相撲大会で優勝を重ね、小遣い稼ぎをしていたそうです。ある時、地元で相撲巡業が開催され、意気揚々とプロの力士と相撲を取ったところ、簡単に倒されてしまいました。惨敗を喫してからは相撲で生計を立てることを諦め、兵隊に志願して職業軍人を目指しました。

第二次世界大戦も終盤の頃でしたので、日本国内での訓練のみで実際に戦地に行くことはなかったようです。

終戦後、邦松氏は当時の松川鉄工所(現メイトックス)に就職して切削技術を学びました。修行の傍ら、ピストルや刃などを作つて腕を磨くなど、昔からいたずらが大好きでやんちゃなところがあつたそうです。

その後、昭和25年頃独立し、名古屋まで中古の旋盤とボール盤を買いに行き、自らリヤカー(自転車)を引いて平坂の住居まで運びました。独立当初の仕事は、松川鉄工所からの請負や川本ポンプの穴あけ等の賃加工でした。

その頃、「石川みよ」さんと結婚し、私が生まれました。初節句には大きな5連の「こいのぼり」をなびかせていたそうです。

生まれてから私は、隣の家(兄 正雄さん宅)に預けられ、いとこのお兄さんたちに遊んでもらっていました。それと同時に住み込みの工員さんが5人くらいいましたので、

その工員さんたちにも遊んでいた記憶があります。

なにせ邦松氏とみよさんは朝早くから夜遅くまで切削加工をし、私と住み込みの工員さんたちを食べさせねばならなかったのです。その頃の世の中は、皆が貧しかったけれども元気があつたように思います。塩や醤油の貸し借りをしたり、近所の人たちが風呂に入りに来たり、お湯を沸かすために協力して廃材を燃やすなど、助け合う温かさもありました。

食事は質素なものでした。朝食は邦松氏が生卵1個、そして母と私、妹、弟は1個の生卵を箸で四等分にして、しょう油卵ごはんを食べていました。また小遣いなどというものはもつたことがなく、隣の三河屋さんというせんべい屋さんの焼いたカス(バリ)を拾って食べて育ちました。そんな食事でもこんなに立派に育つものなのです。

私は工場の現場が遊び場でしたので、ケガをすると大変だということで犬ころのように紐で柱につながれていました。常に工場で過ごし、油や機械のにおいの中で育った私は、跡を継ぐことは当たり前のことのように考えていました。邦松氏は、出掛ける時にはいつも私を連れていってくれました。そのおかげで後継ぎとしてデビューできたのだと思っております。この時に、どこに行っても黙っていい子ぶることを覚えたのかもしれませんが、消極的で引つ込み思案ではありますが、わがままを言わずみんなの後について遊ぶことが出来るようになりました。

それから、名前の「良次」についてですが、当時映画スターの池部良が人気で、そこから「良」という字を取ったそうです。私は長男ですから、一般的に考えれば「良一」とか「良治（良く治める）」が普通だと思いますが、「良次」になりました。読み仮名は「ヨシツグ」ではなく「リョウジ」になりましたが、父母の願いは「良くつぐ」という意味だそうです。

ああ、ありがたやありがたや。

菜根譚後集

一一三

曲意而使人喜、不若直躬而使人忌。無善而致人譽、不若無惡而致人毀。

自己の信念をまげてまでして人を喜ばせるよりは、自身の行ないを正しくして、人に嫌われる方がましである。自分の行ないによいこともないのに人に褒められるよりは、身に悪いことをした覚えがなくて、人にそしられる方がましである。